

地獄は

終

わらない

著／蒼ノ下 雷太郎



1

石を一つ運んで来た。

とても重たい石だ。

小石に見えない大きさの石なんだが、まるで隕石のように体積が狂っている。

成人男性として平均的な腕力がある俺であったが、その俺が両腕を使ってやっど運べる程だ。

赤色の川から、運んで来た片手で握れるくらいの大きさなのに異常な重量を秘めた石を、俺は自分の場所へと置いた。

俺が石を置く場所には、丁寧に分りやすく看板が置かれていた。

四文字熟語みたいに間に空白は書かれていなく、俺の本名がフルネームで書かれていた。

念のために同姓同名がいても被らない

ように、享年と性別、死んだ場所まで書いてやる。

何て仕事熱心なんだろうか、鬼のくせに、税金を貪り食うだけの悪い政治家みたいに、どうぞどうぞサボってくださいよと言いたくなる。

内心舌打ちしながら、俺はまた石を取りに行ってくる。

両腕は疲労感という重量が加わり、その重量がとても重くのしかかる。

足もクタクタだ。本当なら、倒れてもおかしくないはずの疲労だというのに、俺の体は思考とは裏腹に石を取りに向かう。

慣れた結果なのかもしれない。疲れはとっくのとうに超越した。

超越したというより、麻痺したと言った方が適切だろうか。

眠気なんて最初は死んだ身のくせに感じてはいたのだが、最近では何も感じられなくなった。

目蓋にテープを張って強引に開けている感じ。

自分が段々と、この場所に相応しい人物になるのだと改めて思う。

最初は石を運ぶ時に何度も倒れて泣いていたが、今では涙も減んだ。

倒れる事も最近はない。木っつのはずつと突っ立ってるけど倒れないだろ？

電柱ってのはずつと突っ立ってるけど倒れないだろ？

あんな感じ、あれが動くようになった感じ。

脳味噌が電気信号で筋肉を動かすのではなく、地獄という習慣が俺の骨ごと肉体を動かすような、ははっ、こんな生きてる時にだって体験した事が無いというのに、まさか……死んでから、こんな

苦しみを味わうなんて思わなかったんだ

……

しばらく歩くと、全てが赤に染まった赤色の川へと着いた。

まあ、所謂三途の川ってやつだ。

赤色の川へと足を沈ませる。

川だと言うのに、まるで泥沼に浸かったかのようだ。

足には妙な粘着質と重量を感じ、歩くごとに沈んでいくように思える。

川だと言うのに、流れはない。

生きていた頃には、三途の川のイメージは明確に持っていたわけではなかったが、まさかこのようなものだったとは思っていなかった。

川ではなく沼。

三途の沼と言った方が正しい気がする。

本当ならこんな沼に足も浸けたくないし、手も浸けたくない。

だがこれも、報いなのだから仕方ない。

俺は嫌々ながらも、両手を赤色の沼に浸けて、手探りで石を探す。

何も全部同じ大きさというわけではな

いので、出来るだけ小さい石を探す。

大きい石はやはり小さい石より重いのだ。

この地獄は小さい石でも重い、大きい石は狂ってるとしか思えないくらいに重い。

俺の腕が壊れない程の、小さい石を探す。

どうにか手探りで、それは探す事が出来た。

足で踏ん張り、その石をまた先ほどの、俺の場所へと運ぶ。

いつ崩れて倒れてもおかしくない程の貧弱な足取りで、俺は石を運んで行った。

俺の本名、享年、性別、死んだ場所が書かれてる看板を発見する。

そこには待ってたぜと、口にしないでも分かるように、見慣れた笑みを浮かべながら突っ立っている鬼がいた。

三メートルぐらいあるんじゃないかと

思う程の巨体。

髪など一本も生えていない禿頭に、堂々と髪の毛の代わりに生えていた二本の角

赤色の、鬼。

片手には、鬼よりもでかい金棒が握られている。

「お前は、最初からやり直しだあ」

お決まりの台詞を言うと、鬼は金棒を振り下ろした。

ドカッーン。

ガシャッーン。

と、地面は何故か抉られてないが、地面に衝突した音と、俺が先ほど運んだ石が砕かれる音が地獄に鳴り響いた。

ああ、……またやられたか。

鬼は満足したぜと口にしないで分かる程に単調な顔を見ると、金棒を肩で担いで、他の奴の所へと言った。



随分と仕事熱心な鬼な事だ。

悪い政治家を少しは見習ってほしいものだ。

少しばかり心の中で愚痴を言い、また新たに運んで来た石を俺の場所へと置く。

今回はまだマシな方だ。

目標の七個直前の六個目で砕かれた時よりかは、幾分マシと言える。

今回は最初の一個目で破壊されたから、精神的ダメージは少ないと言える。

「いつになったら、終わるのかなあ……」

思わず弱音を吐く。

分かっている。

この地獄に終わりなんて無いという事は……、俺は自殺をした時から、逃れられない地獄へと足を踏み込んだ事を、俺は知っている。

ここは俺が生きていた時にいた世界ではない、地球ではない。

時間が増えるだけだ。

3

親よりも先に死んでしまった親不孝者は、どうやらこの地獄に来るらしい。

地獄の名称は忘れてしまったが、その内容は忘れられない。

だって、未だに継続中だもん。

内容は至って簡単。

石を七つ積み上げる事。

石を、鬼達が作った。自分が石を積み上げる場所。で七つ積み上げればいい。

それがこの地獄の内容で、この地獄から抜け出せる方法。

これだけを聞けば、馬鹿みたいに簡単じゃないかと思えるが、だがそんな上手い話は転がってはいない。

積み上げる石は、隕石のように重い。

石を運んで来て、ある程度積み上げたとしても、必ず七つにはならない。

何故なら、その前に鬼達が来て、ぶっ

壊してしまうからだ。

迷いもなく、慈悲もなく、むしろ鬼達は笑いながら、石を簡単に粉砕してくれる。

正しく地獄の名に相応しいだろう。

しかもこの内容で、休みはないというオチだ。

いや正確には休みはいつでもしていいのだが、休んでる暇がないという事だ。

もし鬼達が自分の場所へと巡回しに来た時に、石が一つも無かった場合は、鬼にぶっ飛ばされるのだ。

物凄く強く殴られる。

しかも死んでる身だから死ねないというジレンマ。

正しく地獄の名に相応しいだろう。

死んでラクになるうと思ってるんだはずなのに、……ああ、俺は一体何をしてるんだろう。

そんなネガティブ思考しながら、俺は



今日も（と言っても、時間が流れる感覚はこの地獄には無いのだが）石を運んでいた。

その途中、懐かしい奴が俺を待ち伏せていた。

「やあ、この前はどうも」

そこには、この前のオッサンがいた。

俺が蹴って見捨てた、あのオッサン……。

ああ面倒臭い、俺に喧嘩を申込みに来たのかな。

本気でやったら負ける事はないと思うからいいが、石運びの邪魔はしないでくれないかなあ。

お前だってそんなに時間ないだろうに、ったく、これだから馬鹿は困る。

「実はね、僕、この地獄から出れる事になってね」

だが、オッサンの口から出たのは予想

外の言葉だった。

おっとと、あまりにも予想外だったんで、思わず石を落としてしまった。

「ははっ、そんなに驚かないでくれよ。……まあ仕方ないか、僕自身もこんな奇跡が起こるなんて思わなかったからね」

オッサンは嬉しそうに、俺を見ながら笑い上げた。

ああ、どうやら、自慢してるらしい。

何か楽しそうだな、こいつ。「僕が鬼達に泣いて許しを請うたらね。しょうがない、お前は特別だぞって事で、助けて貰える事になったんだよ。ふふっ、人生って何が起こるか分からないね。いや、僕は死んでるから、人生って言葉は使えないか、ふははははっ」

不細工な顔は更に歪む。

狂気と歓喜が見事に混ざり合い、気色悪い色を作り出す。

すごいなあ、CG いらすの妖怪だ。こいつ、映画に出れるよ。

すごい、ハリウッドからオフアー来るんじゃないか？

……生きてれば。「それじゃ、ただそれが言いたかっただけだから。君には感謝してるよ。だって、こんなに嬉しい気持ちになったのは、君のおかげだからね。それじゃ、さようなら。そして」

お先に僕は地獄を抜け出すよと言いつ、オッサンは去って行った。

余程、嬉しいのかスキップまでしてる始末だ。

地獄から抜け出すか……ああ、やったかったなあ、あのオッサン。

そう呟き、俺はまた石運びの作業をする事にした。

それからしばらくしても、俺の状況は
何ら変わりはなかった。

いつも通りに、赤色の川に浸かって、
重たい石を運んで、俺の場所に置いて、
また運びに行つて、そして戻ったら壊さ
れていて、その繰り返しだ。

リピート、リピート。

終わる事のない地獄、終わらない地獄。

いや今思ったのだが、終わらないから
こそ地獄なのかもしれない。

だとすると俺は今まで間違いを犯して
いた。

落馬して落ちる、太ってるデブ並に恥
ずかしいミスだ。

終わらない地獄ではない、終わらない
から地獄なんだ。

地獄は終わらない。

それが改めて自分の中で刻み込むよう
に、俺は鬼にある事を聞いた。

俺の石を粉砕したばかりで上機嫌だっ
た鬼は、簡単に俺が尋ねた質問に答えて
くれた。

「ああ、あのオッサンなら生き返った
ぞ」

予想通りの言葉、予想通りの結末だっ
た。

俺が蹴って見捨てた。

顔は不細工で、髪は貧乏な、あのオッ
サン。

やっちゃったな……。

この地獄を抜け出すには、実はもう一
つ方法がある。

それはとても簡単なようで、難しい方
法。
ヘタしたら、石を七つ積み上げるより

難しい選択だ。

それは、自分が死ぬ前の時に、生き
返る事だ。

ようするに、やり直し。

自分が死んでいたという事実は書き直
されて、地獄にいた苦しみも忘れて、も
う一度人生をやり直すというシステム。
ははっ、何て最悪なジレンマだろうか。

「そういえば、あのオッサン泣いてた
なあ。やめろ、やめろお！ とか言っ
たぜ。馬鹿な野郎だ。もう一度人生をや
り直せるのに、何をそんな嫌がる事があ
るんだろうな」

と、鬼は豪快に笑いながら、何処かに
歩いて行く。

オッサンはその鬼に助けを求めたのか
な。

それとも他の鬼なのか分からないが、
まあいい。



自分が死ぬ前の時に、生き返るには、
鬼に助けを求める事。

それが条件となる。

ラクになりたいから死んだのに、死ん
でラクになれなかったから助けを求めた
のに、——世界はちゃんとした歯車で構
成されているらしい。

俺達の世界にあるリサイクルのルール
より、よく出来てるのではないだろうか。
生きてても苦しんで、死んでも苦しん
で、そしてまた苦しむ。

苦しんで、苦しんで、苦しんで、苦しむ。
終わらない。

地獄には終わりはないのだ。

俺は鬼に助けを求めて、生き返ってし
まった奴等を何人も見たから、未だにこ
こにいる。

あのオッサンもそれを知っていたら、
こんな事にはならなかったというのにな。
馬鹿だなあ、ほんと、馬鹿だなあ。
せめて、考える事をやめてしまった人

形の一步手前になる辺りで、助けを求め
ればいいのに。

俺はそうするつもりだ。

「あ、それとよお、お前はいつ頃になっ
たら生き返るんだ？」

鬼は俺に問い掛けて来た。

先ほど豪快に笑っていたあの鬼だ。

まだどっかに行つてなかったらしい。

さっさとお前も生き返れと言いたいので
だろうか、真面目なようで、面倒臭がり
な鬼だ。

俺も面倒臭いのだが、仕方がないので、
ちゃんと答えてやる。

「多分、一生しないね。一生ね」

生きていないと言うのに、一生と言う
んも何だが、まあいいだろう。

俺は生き返るつもりはない。
案外、この地獄も悪いもんではないの